

漢字の読みかたはどのようにして定められたか

——「広報ふっさ」平成四年一月一五日高崎勇作氏の「田村十兵衛翁のこと」を読んで——

田 中 章 男

日本語の中で漢字の読みかたはどのようにして定められたのでしょうか。ここでは「山」という漢字を中心に、おもに中国の本を参考にしながら考えてみたいとおもいます。周の時代の詩をあつめた『詩経』という本をみますと、その中で「山」という字は、たとえば「山に扶蘇有り」「山に橋松有り」とか「南山崔嵬として、雄狐綏綏たり」「彼の北山に陟り、言に其の杞を采る」というふうに出てきます。

『詩経』全体においてこのような詩の形式をくわしくしらべた結果、この「山」という字は「干」や「丸」という字と同じにアンという音を内に含んでいることが確かめられました。(3) 従って『詩経』からみますと、「山」という字の発音は「サン」と考えてよいようです。

次に少し新しい時代の本をみてみたいとおもい、宋の時代に最終的にまとめられた『広韻』という本をひいてみました。そこには「山」の字の発音として「所間切」と書いてありました。これは「反切」という漢字の発音の表しかたで、この時代には「山」は「サン」または「シャン」と読まれていたことがわかりました。(6)

『広韻』では漢字の発音を分類して全体で二〇六のグループに分けていますが、この『広韻』とほぼ同じ時代の漢字の発音を示したものに『韻鏡』という本があります。(7)

この『韻鏡』では漢字全体の発音を整理して四十三枚の表にしていますが、「山」の字はそのうちの二十一番目の表に出ています。(8)

『韻鏡』の特色は、発音の基本的な要素をぬき出して表の形式で配置したところにあり、これによって発音するときの口の形や舌の位置またアクセントなどがこまかく説明

できるようになっていきます。⁽⁹⁾ですから『韻鏡』は漢字の発音をしらべるときにたいへん役にたち、中国ばかりでなく日本においても、漢字を用いて表した日本語の発音を考える場合にしばしば用いられてきました。⁽¹⁰⁾

さらに新しい時代の発音をしらべるために、今度は元の時代の発音を伝えているとされる『中原音韻』という本をみてみました。その中で「山」という字は「寒山」というグループに入っていてその最初に出てきます。このグループには全部で二〇〇あまりの漢字が入っていますが、そのほとんどすべての字がアンという音を内に含んでいます。⁽¹¹⁾

またこの『中原音韻』とほぼ同じ時代につくられた『蒙古字韻』という本をみますと、「山」という字は「シャン」という発音を示した所に入っています。

これらのことから「山」という字はこの『中原音韻』の書かれた時代には「シャン」という発音で読まれていたと考えられています。⁽¹⁴⁾

二

次は「山」という字を意味の面から考えてみました。

最初に後漢の時代につくられた『説文解字』という本をひいてみました。そこには「山」は「宣なり」「万物を生み、石有りて高し」と出ています。

またこの『説文解字』と同じ後漢の時代につくられた

『釈名』という本をみますと、ここでは「山」は「産なり、生物を生むなり」と出ていました。⁽¹⁶⁾

この二つの説明はよく似ています。「山」という漢字の意味は、後漢の時代にはだいたいこのように理解されていたのかもしれない。

ところが後漢の次の魏の時代につくられた『広雅』という本をみますと、ここでは「山」は「龍彰なり」と説明されています。この意味はよくわかりません。⁽¹⁷⁾

また『広雅』のいわば基になった前漢の時代の『爾雅』という本をみますと、関連したことの説明はあるのですが「山」そのものの説明はありません。

一般にことばの本来の意味といったものを考えることはたいへんむずかしいようです。⁽¹⁹⁾このような場合、漢字についてはおもに字形と発音の二つの面から考えることが多いのですが、中国のながい歴史の中ではこの二つの関係がいりくんできているために、簡単には説明できないことが多いろいろ残されているようにおもわれます。⁽²²⁾

しかし「山」という字についてみますと、この字は比較的早く安定した意味を持つようになります。

周の時代の占いのことばをまとめた『易経』という本をみますと、そこにはたとえば「山の下に風有り」「山の上に木有り」とか「天と地は位を定め、山と沢は氣を通ず」「山と沢は氣を通じ、然る後に能く変化し既に万物を生ず

るなり」などと出てきます。

「山」という字はこのようにして安定した意味を持つようになり、やがて国外へも伝わり、日本語の「やま」ということばとも結びついていったとおもわれます。⁽²⁶⁾

三

それでは日本語の「やま」ということばについて考えてみましょう。

奈良時代につくられた『日本書紀』の歌謡の部分のみますと、そこでは「やま」ということばは「椰摩」「夜摩」「野麼」「夜麼」「夜麻」「耶麻」の六通りに書き表されています。⁽²⁷⁾

しかし「椰」「夜」「野」「耶」という漢字を日本語の「や」として読み、「摩」「麼」「麻」という漢字を「ま」として読んだことは、どのようにして確かめられるのでしょうか。

当時の発音をしらべるには一般に『広韻』や『韻鏡』が用いられますが、『広韻』を用いたときには、二つ以上の漢字が同じ発音であるかどうかを確かめるために、一定の操作が必要になります。⁽²⁸⁾しかし『韻鏡』を用いたときには、そのような確認の作業は、表の中のそれぞれの漢字の位置関係をくらべることによって比較的簡単に行なうことができます。

すなわち「耶」と「野」と「夜」は二十九番目の表に出てきて「ヤ」と読み、「摩」と「麼」は二十八番目の表に出てきて「ムア」と読みます。「麻」は二十九番目の表に出てきて「マ」と読みます。

「椰」は表の中には出てきませんが、字形から類推して「ヤ」と読むことができるでしょう。

このように、古代の日本人は多くの漢字の中から特定の漢字を整然と選び出して日本語の「やま」ということばを書き表す形式を、すでに見いだしていました。

次に「山」という漢字を日本語で「やま」と読む場合について考えてみましょう。

平安時代につくられたとされる『竹取物語』⁽²⁹⁾では、のちの時代に書き写された写本という制約があるのですが、その本文においては「やま」ということばはほとんどすべての所で「山」という漢字を用いて書き表わされ、「やま」とそのまま平仮名で書き表す方法をあまりとりませんでした。

従ってこの『竹取物語』では、「山」という漢字が日本語の「やま」という意味と発音とを表すものとして安定して使われているといえるでしょう。

それではさらに「山」という漢字を日本語で「サン」と読んで用いる場合はどうでしょうか。

他の漢字と結びつかないで単独で「サン」と読む場合を

考えてみますと、私たちの日常ではそうした用い方はほとんどなされていないことに気づきます。

ですから一般の国語辞典をみましても、「山」という項目はことばをつくるための一部分すなわち「造語成分」として表示されていたり、ことばに意味をそえる「接尾語」として表示されていたりします。

それでは日本語において「山」という漢字を他の漢字と組みあわせて用いる場合はどうでしょうか。

奈良時代にまとめられた漢詩集の『懷風藻』をみてみますと、ここでは「山」という漢字は「山水」という組み合わせで用いられることが最も多く、次いで「山中」「山川」という組み合わせがよく用いられていました。

こうしてみますと古代の日本人が「山」という漢字にどのようなおもいを託していたかがうかがえ興味深くおもわれます。

四

ところで「山」という漢字は漢和辞典などをみますと、「サン」という読みかたのほかに、「セン」という読みかたも載せています。

それではこの「セン」という読みかたはどこから出てきたのでしょうか。

そこでもう一度『韻鏡』にもどって「山」という字の発

音を考えてみましょう。

『韻鏡』の中で「山」の字は「外転第二十一開」という表の「平声・歯音・清・二等」という所に出てきます。

ここで「平声」というのは平らかな音、「歯音・清」というのはサ行の音、「二等」というのはアンという音であることを示しています。従って「山」という字は、「平声」とあるので平らに読み、「歯音・清」で示されたサ行の音と「二等」で示されたアンの音の組み合わせで「サン」と発音することがわかります。

これに対して「三等」と「四等」というのはエンという音を示しています。従ってたとえば「仙」という字は「平声・歯音・清・四等」となっていますから、「平声」で平らに読み、「歯音・清」のサ行と「四等」のエンの組み合わせで「セン」と発音することがわかります。

そうしますと『韻鏡』でみるかぎり、「山」は「二等」のグループに入っていますので、「三等」や「四等」の字のように「セン」とは発音されず、「サン」と発音されていたことがあきらかになりました。

それでは「山」の字を日本語で「セン」と読む根拠はどこにあるのでしょうか。

前に引用した『説文解字』にもどってみましょう。そこでは「山」は「宣なり」と説明されていました。「宣」の字は日本語で「セン」と読みます。

中国ではことばを説明するときに似かよった発音の字を使うことがよくあります⁽³⁴⁾。この『説文解字』の説明もそのようなものであるとしたら⁽³⁵⁾、「山」の字も「セン」と読む可能性があるようにおもわれます⁽³⁶⁾。

そこで「山」の字の発音をしらべたときと同様に、『詩経』という本の中で「宣」の字がどのように発音されていたかをしらべてみました。そうしますと「宣」の字は「繁^{はん}」や「歎^{たん}」の字のようにアンという音を内に含んでいることがわかりました⁽³⁷⁾。

こうして「宣」という字は『詩経』の時代には「山」の発音と比較的似かよっている「シワン」という発音であったことが確かめられます。

従って『説文解字』では「サン」という発音を持つ「山」という字を説明するために、「シワン」という似かよった発音を持つ字「宣」を用いたと考えることができるわけです。しかしここで基本となっているのは「アン」という音であり、「エン」という音ではないようです⁽³⁸⁾。

また同じ後漢の時代の『釈名』という本で、「山」を「産なり」と説明していたのも、たぶん似かよった発音の字を選ぶことによってことばの意味を述べようとしたものとおもわれます。

それでは「山」の字を「セン」と発音することをはっきりと示している資料はないのでしょうか。今までのところ

中国の古い資料としては適切なものはあまりないようにおもわれます⁽³⁹⁾。

宋や元の時代になると『韻鏡』のような形式の本がいくつかつくられてきますが、それらをみましても「山」の字はみな「サン」と発音するグループに入っていて、「セン」と発音するグループには入っていません。

こうした中であって、宋の時代に『広韻』を受けついでつくられた『集韻^{しゅういん}』という本をみますと、ここでは「山」という字が「サン」と「セン」の二つの発音を持っていることがはっきりと示されています。

『集韻』はいわば漢字の発音を集大成したものとなっていますので、日本語における漢字の読みかたを考えてゆく場合も含めて、今後も様々な面から研究が続けられてゆくことでしょう⁽⁴²⁾。

五

こうしてみてきますと、漢字の読みかたをしらべるために、『韻鏡』がいままでたいへん重要な役割を果たしてきたことがよくわかります。

福生においても、江戸から明治にかけて多くの業績を残した田村十兵衛豊昌がこの『韻鏡』を研究していたことが、高崎勇作さんによって最近紹介されました⁽⁴³⁾。

多摩の地域ではこのような漢字や漢文の研究はかつてど

のようになされていたのでしょいか。⁽⁴⁾ 近い将来にさらに新たな紹介がなされることをねがっています。

注

- (1) 『詩疏平議』黄焯 上海古籍出版社
 (2) 『詩経』目加田誠 講談社
 (3) 『詩韻譜』陸志章 大平書局
 (4) 『校正宋本広韻』芸文印書館
 (5) 『錢玄同音学論著選輯』山西人民出版社
 (6) 『中国声韻学通論』林尹 世界書局
 (7) 『陸志章語言学著作集(-)』中華書局
 (8) 『切韻研究』邵榮芬 中国社会科学出版社
 (9) 『広韻導読』敵学書 巴蜀書社
 (10) 『古音与教学』郭啓熹 福建教育出版社
 (11) 『敦煌学論文集』「切韻系統」姜亮夫 上海古籍出版社
 (12) 『韻鏡校注』龍宇純 芸文印書館
 (13) 『韻鏡校証』李新魁 中華書局
 (14) 『音注韻鏡校本』藤堂明保・小林博 木耳社
 (15) 『韻鏡研究』孔仲温 台湾学生書局
 (16) 『古代国語の音韻について他二篇』橋本進吉 岩波書店
 (17) 『中原音韻』芸文印書館
 (18) 『陸志章近代漢語音韻論集』商務印書館
 (19) 『北宋中原韻輟考』朱曉農 語文出版社
 (20) 『論中原音韻』周維培 中国戲劇出版社
 (21) 『中原音韻新論』北京大学出版社
 (22) 『蒙古字韻校本』民族出版社
 (23) 『中原音韻音系』楊耐思 中国社会科学出版社

- (15) 『中原音韻首位系統』薛鳳生 北京語言学院出版社
 (16) 『說文解字』中華書局
 (17) 『積名疏証補』王先謙 上海古籍出版社
 (18) 『廣雅疏証附補正及拾遺』王念孫 中文出版社
 (19) 『爾雅校箋』周祖謨 江蘇教育出版社
 (20) 『同源字典』王力 商務印書館
 (21) 『說文解字導読』張舜徽 巴蜀書社
 (22) 『字說』「帝字說」吳大澂 芸文印書館
 (23) 『觀堂集林』「秋夭」王國維 中華書局
 (24) 『國故論衡』「語言緣起說」章太炎 広文書局
 (25) 『文字声韻訓詁筆記』黃侃 上海古籍出版社
 (26) 『文字遺遙』「文字遊心」白川靜 平凡社
 (27) 『帛書周易校釈』鄧球柏 湖南人民出版社
 (28) 『周易集解』北京市中国書店
 (29) 『周易外伝』王夫之 中華書店
 (30) 『国語史論集』「言語と文字」岩淵悦太郎 筑摩書房
 (31) 『上代仮名遣の研究』大野晋 岩波書店
 (32) 『切韻考』陳豊 台湾学生書局
 (33) 『竹取物語』阪倉篤義 岩波書店
 (34) 『古典学入門』池田亀鑑 岩波書店
 (35) 『新潮現代国語辞典』山田俊雄・築島裕・白藤礼幸・奥田勲 新潮社
 (36) 『三省堂国語辞典第四版』見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武・飛田良文 三省堂
 (37) 『懷風藻』文華秀麗集 本朝文粹 日本古典文学大系69
 (38) 小島憲之 岩波書店
 (39) 『爾雅論略』駱鴻凱 岳麓書社

- (35) 『説文箋識四種』黄侃 上海古籍出版社
 『音学五書』「古音表」 顧炎武 中華書局
 『古韻標準』「卷一」江永 中華書局
 『戴東原先生全集』「声韻攷」 大化書局
 『説文解字注』「六書音均表」 上海古籍出版社
 『漢語史稿上冊』「第十五節 上古鼻音韻母的発展」王力 中華書局
 『漢語音韻史論文集』「古漢語韻母系統与《切韻》」張琨 華中工学院出版社
 『上古音』何九盈 商務印書館
- (37) 『詩韻譜』前出
- (38) 『漢語方言字彙(第二版)』北京大學中國語言學系語言學教研室 文字改革出版社
 『漢語方言調查基礎知識』邢公畹 華中工学院出版社
- (39) 『学研漢和大典』「中国の文字とことば」藤堂明保 学
 習研究社
 『しにか』一九九二年四月号(第三卷第四号)「中国語学
 の広がり」尾崎雄二郎 大修館書店
- (40) 『等韻五種』芸文印書館
- (41) 『集韻』上海古籍出版社
- (42) 『中国の文芸思想』「陳奐伝―或る清朝漢学者の生き方」
 目加田誠 講談社
- (43) 『広報ふっさ』平成四年一月十五日 No. 367「田村十兵
 衛翁のこと」高崎勇作 福生市
- (44) 『太田晶二郎著作集第一冊』「韻鏡三話」吉川弘文館
 (たなか・あきお 福生市古文書研究会会員 瑞穂町在住)